

新技法シリーズ
ARTS KNOW-HOW SERIES

住いをデザインする

家族のふれあいを中心に住宅設計を考える

新田広史

新技法シリーズ

住いをデザインする

新田広史

美術出版社

本書のめざすもの

本書は専門学校の1年生の住宅設計テキストとして書き始めたものです。彼らは建築を志し、これから建築を身近な住宅を足がかりに勉強を始めようとしているのです。それは、これから自宅に手を加えよう、あるいは新築しようとしているいわゆる建築素人の人々の姿勢でもあるのです。両者の異なる点は片や学生は住宅に関する幅広い応用の効く基礎的考え方を身につける必要があり、片や建築主は目の前の具体的な自宅をいかに造るかに考えが集中しています。

現代の日本の住宅は3DK、4DKといった、もともと公団住宅などの便宜的な間取りを表わす記号が一般戸建て住宅にも使われるといった、部屋数最優先の考え方がまかり通っています。確かに各自の部屋があり、リビングがあり、食堂があり、基本的水廻りが設けられていれば「一戸建て住宅」として住まうことができます。また方眼紙のマス目を数えながら4畳半、6畳、8畳と四角をつらねていき、それを大工に渡すとそのままのものが建ってしまうのも日本式木造住宅の特色です。

しかしちょっと待ってください。これで莫大金をかけ、一生に一度の大仕事を決めてしまっているのでしょうか。注文住宅でなく、建売り住宅を購入する場合にも、部屋数さえあれば、あとはどうにか住める、と考えて決めてしまっているのでしょうか。

単身、あるいは夫婦のみで住む家の場合、あまり問題はないかもしれませんが、しかし多くの場

合、家を求める理由は家族と共に住むからです。単に雨風をしのげればいい、単に家族の分だけ部屋があればいいでは「家族と共に住む家」とはいえないことが本文を読むうちに理解していただけたと思います。

町の小さな書店にも書齋や居間、あるいは台所についての数種類の単行本が必ず並べられています。素敵な家を紹介する雑誌もいくつか置かれており、大型書店の建築書コーナーは星の数程の住宅関連図書が並べられています。

学生、あるいは住いに手を加えようと考えている人がこのコーナーに足をはこび、これらの中から1〜2冊を求めようとしても恐らく当惑してしまいうに違いありません。それ程住宅関係の書籍は氾濫しています。

それらの本には共通した特色が見られます。しかし、それが読者にほんとうに役に立つかという疑問もあります。その特色とは、

- ① 特徴の不明確な多数の平面図をら列すること。
平面図を200あるいは500と掲載し、それぞれにわずかなコメントをつけるもの。目うつりするばかりで何が本当に必要であるかは不明確なまま、判断を読者にまかせ著者の意見を述べていないもの。
- ② 一視点からのみ美しく紹介すること。
その視点からの写真映りはとてもよいものであるが、住い全体としてはバランスに欠け、計画レベルの低いもの。

- ③ 一部分だけをとり上げ詳述すること。

例えば「亭主の城たる書斎」について、こと細かに諸手法を解説するが、それを家全体の中にどう位置づけるかにはふれないもの。

- ④ 解説文を長々と読まねばならないこと。

文章を物語風に何ページにもわたって続けるもの。

- ⑤ 初学者、一般の人に必要ない専門的事項について解説すること。

例えば変形敷地の法的規制をいかにしてかいくぐり、少しでも大きな家を建てるかといった方法を解説する専門書的なもの。

そして最も問題になる点は

- ⑥ 家族と共に暮らす家という意識が希薄なこと。

家は家族が集まり、寄り添って住み、家族間のコミュニケーションあるいはスキンシップを醸成する原点であるにもかかわらず、独立した部屋を多数並べそこそこにまとめることに終始してしまっているもの。

以上がよくある例ですが、本書ではこのようなくとのないよう構成したつもりです。

本書は住宅設計の基本にたちもどり、あくまで住宅全体のバランスを考慮し、総合的に質の高い、住みやすい住宅の設計手法を解説することに努めています。

具体的には、本書においては、エッセンスを寄せ集めたモデルプランを9例のみ製作し使用しま

した。そして絵を中心に解説を進めています。

住宅全体の計画を説明するときはもちろんのこと、各室の設計を述べる時も、この9例の中より代表例を選んで使用し、必要に応じて内観図をつけました。住宅規模は、公庫融資の対象ともなる130m²未満に設定してあります。

なるべく、図と絵により視覚に訴え解説の多くの部分を伝えるようにしました。また初学者、時には設計家においても気づかずに「何となく」設計している盲点的な誤りを×の例として各所に例示解説し、注意を促しています。この×の例は住宅金融公庫編「住宅図集」より、新たに描きおこしたものです。

なお、本書の執筆に入るにあたって、建築関係雑誌に発表された住宅の中から、特殊な条件で設計されたもの、非常にデザインに凝り一般的でないものを除き、約300軒を選出し、会の内部で検討を行ない、その中で特に興味がもたれる住宅をピックアップし、連絡を取らせていただき、ご承諾の得られた多数のお宅におじゃまさせていただくことができました。住いの使い方、住まれ方、気に入っている点、いまひとつ満足できない点などについての貴重なご意見、ご提言をいただくと同時に、ころよくお住いの中を案内していただきました。これらは×の例、あるいは9例の中にもり込まれています。ここにあらためて感謝の意を表します。

目次

はじめに	13
------	----

I 生活スタイルの確認 21

1 生活スタイル	21
2 どのように暮してきたか	22
3 現在どのように暮しているか	23
3-1 例としての3DK	23
3-2 家族構成・成長・変化	25
3-3 生活時間・習慣	26
3-4 趣味あるいは特殊なこと	27
4 行動を思い起して	28
5 新居に何を求めるか	29

II 敷地特性を生かす 31

1 街並みと法規	31
2 地域の中に建つ住宅	33
3 敷地条件を生かす	34
9 敷地の生かし方	
3-1 南東の敷地	36
3-2 東の敷地	38
3-3 北東の敷地	40
3-4 北の敷地	42
3-5 北西の敷地	44
3-6 西の敷地	46
3-7 南西の敷地	48
3-8 南の敷地	50
3-9 中の敷地	52

III 構造・設備 54

1 構造	54
1-1 木造	54
1-2 鉄骨造	55
1-3 鉄筋コンクリート造	56
1-4 混合構造	57
2 設備	59
2-1 電気設備	59
2-2 給排水ガス設備	60

2-3	空調・換気設備	61
2-4	その他の設備	63

IV 各部屋のむすびつき 64

1	Aさんの住い	65
2	各部屋のむすびつき	70
2-1	厨房と食堂	70
2-2	居間と食堂	75
2-3	家事空間の連繋	81
2-4	玄関と家事室・子供室	85
2-5	個室と浴室	90

V 各部屋の設計 92

1	居間	92
2	厨房	97
3	ユーティリティ	100
4	玄関	103
5	階段・廊下	106
6	寝室	108
7	子供室(個室)	112
8	衛生・水まわり	115
9	アプローチ	118

IV 補足編 120

1	いかに行儀悪く暮すかー 1	120
2	いかに行儀悪く暮すかー 2	121
3	勉強室を造る	123
4	子供に個室は必要か	124
5	押入れとはフトン入れである	125
6	面積配分を考える	126

設計チェックリスト 131

おわりに 135



新田広史（にった ひろし）

1953年 千葉県生まれ

1978年 明治大学工学部建築学科卒業

1980年 明治大学大学院工学研究科修了（建築学専攻）
工学修士

1980年 設計事務所勤務 現在に至る

1985年 東京建築専門学校非常勤講師（建築計画） 現在に至る

一級建築士

日本建築学会会員







